



初めてのプレゼントは…

高富中学校3年 吉井 陽向

私の名前は、「よいひなた」。私は、自分の名前が世界で一番嫌いだ。誰にでも、コンプレックスはあると思う。その誰にもあるコンプレックスが、私の場合は、両親が付けた自分の名前だ。

以前、友達に、
「違う読み方をしたら太陽の『よう』に向かうの『こう』で、『ようこう』君だね。」

と悪意のあるいじりをされて、すごく嫌な気持ちになった。自分ではどうしようもない出来事に、複雑な気持ちを抱いた。その時までは、自分の名前に自信をもっていたのに、突然自分の名前に自信がなくなった。「私の名前はそんなにおかしいのかな。」「いじりやすい名前なのかな。」と悲しい気持ちで押しつぶされそうになった。さらに「お前の名前はいろんな人にすぐ読んでもらえるのか?」とまた別の人にいじられた。相手に悪意がないのは分かっている。でも自分の名前にコンプレックスを感じている私は心に深い傷を負った。相手に悪意があってもなくても、自分が気にしていることに注目が集まると、不快な思いをすることを、自分を実験台にして知った。

その夜、自分の名前にコンプレックスを抱き、いじられることで怒りのバロメーターの限界を感じた私は、親に文句を言い放った。

「私の名前は、みんなにからかわれるから大嫌い。」

つい怒りに任せて言ってしまったが、お

父さんの口から出たのは、予想外の温かい言葉。

「俺がつけた『ひなた』という名前には、男性、女性の垣根を越えて、太陽のようにいつでも明るく前に向かって強く生きてほしいという思いを込めたんだ。」

すると今度はお母さんが、
「『ひなた』という名前は男性、女性どちらでも似合う名前だけど、世界に一つしかない意味をもっていて、あなただけ特別なんだよ。」

その日、お母さんから私の名前の命名書を見せてもらった。そこには習字が苦手なお父さんが心を込めて一生懸命書いた「陽向」という力強い文字があった。私は、両親の気持ちも知らずに文句を言っていた自分が恥ずかしくなった。私の心の深くくぼんでいる所に、希望の光が差し込んだ気がした。

「名前の由来の続きがまだあるんだけど、もう少しお父さんの話を聞か?」

「うん、聞きたい」

「戦争や災害が起きた時とかに、心が暗くなる時あるよね? 太陽つてさ、そういう時でも、どんな時でも、世界中のいろんな人の足元を明るく照らしながら、世界中みんなの未来までも照らしているんだよ。」

私の名前には、太陽が深く関係しているんだ。太陽は、私たち一人一人の未来を照らしている。それが私の名前の由来。私は何があったとしても大丈夫、どんなことに

も負けない。だって私は、みんなを照らし、明るい未来に導く太陽なんだから。

以前、友達が私に言ってくれた言葉が、今も私の胸の奥に残っている。

「ひなたつて、太陽みたいでエネルギーを感じるいい名前だよね」

「えっ、ほんとに? ありがとうー」

名前は、人生で初めてもらうプレゼント。最初のプレゼントを両親からもらえるって、なんて幸せなんだろう。

もしかしたら大人に近付くにつれて、両親と関わる時間が減っていくかもしれない。でも、名前の由来である太陽の下で、かけがえない時間を、私は家族と共に過ごしたい。今の時代は名前を変えたければ、自分の納得いく名前に改名することが出来る。だけど、両親が、愛する我が子の明るい未来を願ってつけた、その行動に意味があると私は思う。これから自分がどんな状況になっても、私は世界で一人だけの「吉井陽向」。どれだけ時間がたっても、私は「吉井陽向」であり続ける。だって、一人一人の名前は必ず意味をもっていて、両親からの願いが込められているから。
「ひなたつて、太陽みたいでエネルギーを感じるいい名前だよね」

この名前をつけてくれた両親と、自分の名前が大好きだ。私の名前は「吉井陽向」。世界で一番素敵な名前だ。

令和7年度 山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。



毎日が退屈でつまらないあなたへ

高富中学校3年 松村 琉亜

「私たちが退屈でつまらないと感じる日々は、実は大切で、かけがえのない素晴らしいものだ。」

この言葉を聞いて、幸せな人だけが口に出せる、聞こえがきれいなきらいごとだと感じる人はいないだろうか。しかし私は、この言葉は少しも大げさではないと思う。なぜならいつも通りの毎日を送る中で、小さな幸せが積み重なっていると考えているからだ。それだけではなく、私たちの毎日の幸せは、家族や友達など身近な人々と関わることによってつくられている特別なものだと考えている。

「幸せとはなんだろう。」

きっと今を生きる多くの人が、そんなふうを感じたことがあるのではないだろうか。幸せという言葉は抽象的で、目に見える形がないだけでなく、自分が幸せだと感じる具体例をどれだけ挙げて、聞く人全員に当てはまることはないからだ。

数年前までは、家族と夕食をとったり、ゲームをして笑い合ったりすることで幸せを感じることができたのに、SNSで人の生活を簡単に見ることができるようになったことで、自分と他人を比較することが増え、気にする必要がないとわかっていても、焦りを感じる。そんな人がきつとたくさんいると思う。私も、友達の生活を知る機会が増え、自分の生活がつまらないもののように感じるようになった。しかし、考えてみてほしい。自分のそばにいて話を

聞いてくれる人がいる。見返りのない愛をくれる人がいる。そんな私たちの生活は本当につまらないものなのだろうか。人に我慢できるような生活をするだけで本当に私たちの幸せなのだろうか。

四年ほど前、私は、学校に行けない日がたくさんあった。朝、起きると、体が重くて、起き上がろうとしても、見えない何かに押しつぶされそうになり、動けなくなった。毎日のように遅刻したり、休んだりしている私に、母は何を思っていたのだろう。でも、あの頃の私は、怖くて聞くことができなかった。

母は、毎日仕事があるのに、家を出るぎりぎりの時間まで「ほんとに大丈夫？」二人で残していくのは心配」と、いつも私の心配をしてくれた。それなのに、申し訳ない気持ちと学校を休む罪悪感とで、私の胸はいっぱいになり、素直に感謝を伝えることができなかった。

ある朝、授業に置いていかれることへの焦りや、腫れ物のように扱われ続けることに苛立ちを感じた私は、母に強くあたってしまった。

「しつこい！」

いつもなら言い返してくる母なのに、その日は、

「ごめんね。」

と弱々しく返すだけ。母は、学校に行くことができない理由を話せない私に寄り添ってくれていたのに。私はその日、母が

仕事に行くまで顔を合わせることも、「いつてらっしゃい」と声をかけることもできないまま、学校を休んだ。

お昼を過ぎた頃、空腹を感じて部屋を出ると、いつものように昼食が用意されていた。

「おいしい。」

あんなにも冷たい態度をとってしまった私に、母は限られた時間を使って昼食を作ってくれたのだ。私にとっての当たり前が特別に変わる瞬間だった。その日の昼食は、とくに冷めているはずなのに、今まで食べた何よりも美味しく温かく感じた。母の優しさが胸にしみていくような気がして、ついさっきまでいらしていた自分が恥ずかしくなった。どんな時でも母は、私に見返りを求めず、愛をくれている。

ふとした時に、家族の温かさを感じる。そんな経験が誰にもあるのではないだろうか。でも、当たり前のことと思っていたら、毎日学校に行けること、食事をとれることが、どんなに幸せで特別なことなのかを感じることはできない。だから私は、一日一日の幸せをかみ締めながら、誰よりも笑顔で過ごしたい。そして、当たり前のことにも感謝の言葉を伝えたい。

「あ、ありがとう。」

「うん、ありがとう。」

つまらない日なんてない。私たちは、幸せな日々を送っている。